

# 出世景清

## 第一

普門品―法華經  
廿五章觀音經  
大乘八軸―寶敬  
を説ける法華經  
八卷

わりなし―隔て  
なし

扱も其後、妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第廿五は大乗八軸の骨髓、信心の行者大慈大悲の光明に預り奉る觀音智力ぞ有難き。爰に平家の一族惡七兵衛景清は、西國四國の合戦に討死すべきものなりしが、死は軽くして易し、生は重くして難し、所詮命を全うして平氏の怨敵、右大將賴朝を一太刀恨み、平家の恥辱を雪がんと落人となり、尾張の國熱田の大宮司に、いさよか知るべありければ、深く忍びて居たりけり。素より大宮司は平氏の重恩の人なれば、深くいたはり、ひとり姫にをのの姫と聞えしを景清にめあはせ、子とも婿ともかしのづき給ふ心ざしこそわりなけれ。景清大宮司の御前に出で、「誠にそれがし無二の御懇志に預り、ながく在居仕り、身は埋木と朽果ん、未頼みなき身ながら、せめて賴朝を一太刀うかどひ、君父の恨を散じ、その後は腹切て兎も角も罷りならんと

四相一我相、人相、衆生相、壽者相

ござんなれ、こ  
もあるなれの約  
構へて一注意し  
て

空しき月日を送り候。然る處に今朝屈竟の事を聞出し候。其故は、鎌倉殿は南都東大寺大佛殿を御再興あるべしとて、秩父の重忠かの奉行を承り、きのふの暮ほどに此處をうつて通り候よし。たとへば頼朝七重八重の城廓に取こもり、天地に黒鐵の網を張つて用心きびしく候とも、此景清が一念にてなどか狙はで候べき。去ながら重忠常に頼朝の側を離れず、神變不思議を兼ねたれば、其身は都にありながら、心はなほ鎌倉殿の側にあり。かう申す景清は二相を悟り候へ共、重忠は四さうを悟る。頼朝に出合既に討んとせしこと三十四度に及べども、彼の重忠に隔てられ、終に本望遂げ申さず。然れば先重忠をさへ打取らば、頼朝を打ん事踵を廻らすべからず。重忠此度東大寺の奉行にのほる事幸かな仕合哉。天の時來りたり。忍びやかに南都に下り、重忠が首ひつさけて參らんに早お暇」と申さるよ。大宮司聞給ひ「實に屈竟の時節ござんなれ。構へて人に悟られ給ふな。急いて事を仕損ずな。片時も早く」とありければ、北の方も悅びて、宗盛公よりたび給ふ、痔丸といふ名劔を景清に給はり、北首尾よく仕果せ給ひなば一日も逗留なく、早く御歸りませ」と門出の盃出さるれば、たがひに千秋萬歳と、獅子の勢龍の勢、いさみいさみて行く虎の、尾張の國を立出て、奈良の都へ三重上らるよ。いで其頃は、文治五

松にも云々一  
松にも花を貸  
すの言掛け  
橋目一見張り役

柳櫻を云々一青  
白を交へる、古  
今集の歌を引く

むべも云々一此  
殿は宜も富みけ  
りの歌をとり屋  
棟が三つも四つ  
もあるを云ふ  
つきせぬ一月に  
かけて西方淨土  
を利かせたり

年春過ぎて夏きにけらし白旗の、源氏の大將頼朝公は、南都東大寺大佛再興の御願にて、  
畠山の重忠奉行職を承り、松にも花を春日野や、飛ぶ火の野邊に假屋をうたせ、横目帳  
附勘定方、大和大工に飛驒匠、杣人木作り事をはり、今日吉日の柱立。我身は棧敷に一だ  
ん高く、村農の大幕打せ、つゞいて見えしは本田の二郎、其外のさぶらひども、帳場々々  
に標を立て、弓鎗長刀ふきぬき、やなぎごころをこきませて、花やかなりける御ふし  
んなり。かくて番匠の棟梁、木工の頭修理の頭、おのがしなる出立、吉方にうちむかひ、  
まづやがための、祭文を唱へつゝ、御幣を振て再拜し、手斧はじめのその儀式、嚴重に  
こそつとめけれ。むべもとみけりさきくさの、みつば四つばの大伽藍、手斧はじめの壽  
に、千代をかためて柱立。春は東に立そむる、是萬物の初めなり、夏は南にめぐる日  
の、あやめが軒やかほるらん。秋は又西の空、盡せぬ契かたどりて、天の河原に橋柱  
しらけたつるや檣鉤、雲をそなたに遺鉤、冬は北にて筒井筒、水こそ家の寶なれ。め  
ぐれやまはれ井戸車、かまど賑はふへつゝい殿。先づ陰陽の二ばしら、二本のはしらは女  
神男神を表したり。三本のはしらは、三世の諸佛、四本のはしらに四天王、四海泰平民  
安全と祝ひこめたる墨壺の、いと直なる國なれば、寶や宿に三日錐。鋸屑のかずく

兜率天一六欲天  
の第四にて彌勒  
の法を説かるゝ  
所

ふきたて一瓦に  
鎔き入る  
こまろ一垂木の  
端  
度一米倉

と、濱の眞砂と君が世は、かぞへつくさじおもしろや。しかるにこの大伽藍と申すは、  
 聖武皇帝の御建立、三國無雙の靈場なり。兜率天の内院を、さもありくくと移さるゝ。  
 塔の高さが二十丈、佛の御丈十六丈、雲につどげばおのづから、月を後光と三笠山、柱  
 のかすは天台の、一念三千の機をあらはして、三千本と定まれり。軒の檻は法華經の  
 文字のかす、六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狗、さて正面より四方四面の、  
 とびらくの彫物には、松に唐竹牡丹に獅子、豹と虎とが威勢を争ひ、百千萬のけだ  
 ものをほつたてく、くるりくと巖に追上け追下し、風に嘯ぶく波間より、紫雲を  
 卷て登り龍又くだり龍、玉をつかんで虚空にさよけ、鱗を立たる其いきほひ、手をつく  
 させて彫りつくし、扱棟瓦檐瓦、金銀瑠璃玻璃、砗磲瑪瑙、珊瑚琥珀水晶をふきたてふ  
 きたて、珊瑚樹のこまるをひつしと打たる臺には、金欄錦に柱を包んで黄金の鉾を輝かせ  
 ん。棟木を負ふの柱をして、南畝の農夫よりも多く、梁を架するの椽は機上の工女より  
 も多く、釘頭の磷々たるは、度にあるの粟よりも多く、旦暮の説法讀誦の聲は、市塵の  
 言語よりも多からしむ。佛法繁昌四海鎮護の大伽藍、如意満足のはしら立。めでたしく、  
 ナ、めでたしと、手斧おつ取りてうくく。槌おつ取てはつしていく。鉤取延さ

色代―挨拶

緩怠―横者、失禮

ぞんざい―粗忽

推參―無禮

かだ―ずるい事

らくらく、えいさららくらくてうらくらくと、打始め取始め、三々九度の御酒をさよ  
け、千たび百たび祈念して、重忠に色代し、棟梁座をぞ下りける。手斧はじめも事すぐ  
れば、数千の番匠下々まで、皆々小屋にぞ三重入りにける。はるか跡より、四十ばか  
りの男なるが、人足とおほしくて、晝餉の櫃になひ、頬冠りして通りける。秩父の執  
權本田の二郎さつと見て、「ヤア是成下郎めは、かよる晴いの庭なるに、頬冠は緩怠なり。  
色代せよ」と咎むれば、かの男小聲になり「作法もしらぬ下々なれば御免」と云ひてつ  
と通る。本「どこへ」。扱々ぞんざい千萬なる奴めかな。頬冠を取ずんば、誰かある、  
それ打て擲け」と下知すれば、中間共承り一どにはらりと取まはず。番匠の棟梁此よし  
を見るよりも、棟「いや是本田殿、彼奴は其日雇ひの人足にて、差別も知らぬ下郎なれば、  
さぞ推參も候べし。去ながらかよる目出たき折なれば、たゞ何事も穩便にはからひ給へ」  
と申ける。本田聞も入れず、「いやさ、彼めはちと人に似たるもの候」といへば、棟「扱  
めづらしや本田殿、人が人に似たるとは事新しう候。いかに下郎め、おのれ大分の錢を取  
りながら、かだをして働かず。横著ひろぐゆるゑにこそ人々にも怪まれ、祝儀に邪魔をな  
しけるよ。價を損にする迄ぞ。罷り歸れ」と叱りければ、「よき幸」と景清は荷ひし櫃を下

餘すな一逃がす  
な

尾羽云々浪人  
者の妻れし貌  
(怪官集覽)

しおき、迷惑さうにもみ手をして、表にこそ出らるれ。重忠幕の内より御覽じて、罵し  
ばらくしばらく。いかにかたぐ、平家の落人こよかしこに忍びるて、君を狙ふと聞きけ  
るが、唯今の入足は、まさしく悪七兵衛と見しはひがめか。彼餘すな。いふても是は一大  
事の柱立の淨めの庭。穢らしてはいかどなり。前なる野邊に追出し打て捨てよ」と宣へ  
ば、もとよりはやる關東武者。我もくとかけむかふ。景清是をみて、になひ棒に仕込み  
たる件の痣丸するりと抜いてさしかざし、大ぜいを左手にうけ、頭を叩いてからくと  
笑ひ、是はお侍、某は尾羽を枯せし鎌倉の浪人者にて候が、朝夕に迫り、かゝる佗しき  
いとなみを仕る。さすが人目の恥かしく、顔をかくして有ければ、なんぞや某を悪七兵  
衛とは、眼がくらみてありけるか。たゞしは其景清が恐ろしさに面影に立けるか、よし何  
にもせよ。是程まで雑言せられ、堪忍罷ならず。景清程こそあらず共、そつと手なみを  
みせんす」と、例の痣丸小脇に搔込み、多勢が中に割て入り、火水になれと三重切合け  
る。時刻もうつらぬ其内に、十四五人切ふせ「重忠に見参せん」と、此處のつまり彼處  
のくまに駈入りくさわけども、大勢にへだてられ、是今ははや是迄なり。深入して雑  
兵共に手負ふせられては、景清が末代の名折なり。またこそ時節あるべけれ。いでおつ

拂うて落ゆかん」と番匠箱をおしひらき、大鑿小鑿手斧鋤鉋、屈竟一の手裏劔と、おつ取りおつ取り打立れば、さしにも勇む軍兵共、わつといふてはさつと引。なほも寄來るもの共を、小屋の小柱引拔て、八方無隅に三重ふりまはれば、秋の嵐にちる紅葉、むらくはつとぞ逃げにける。是「ヲ」さもさふづさもあらん。此たびは仕損ず共、此景清が一念の劔は岩を徹さんものを」と、跳りあがり飛あがり、齒がみをなして行く雲の、月の都に上りける。惡七兵衛が力業、早業輕業神通業、唯飛ぶ鳥のごとくなりとて、恐れぬものこそなかりけれ。

## 第 二

去程に、誠や猛武士も、戀に窺るよならひあり。薪を負へる山人も、たちよる花の景清も、つねに清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂の片ほとりに、阿古屋といへる遊君に、假初伏のかりあふし枕、いつしかなれて今ははや、二人の若をぞまうける。兄のいやいし六才、弟のいや若四才にて、世におとなしくぞ見えにける。阿古屋はもと

研を云々―無骨  
者も花を慕ふ、  
景に盛をかく

## しほ―機會

ずんど―最の意  
(偶言集覽)

より遊女なれ共、妹脊のなさけ細やかに、世になき景清をいとほしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家督をつがせんと、ならはぬ女の身ながらも、兵法の打太刀し、武道を教ふる心ざし、たぐひ稀にぞ三重聞えける。かゝる所へ、悪七兵衛景清は重忠を打損じ、やうくとして清水や、あこやが庵に著給ふ。女房子供を引連れ、阿こは珍らしや何として御上り候ぞ。先こなたへ」と請じける。景清申しけるは、「ないく御身も知るごとく、我平家の御恩を報ぜんため、鎌倉殿を狙へ共、其かひなくて一兩年は、尾張の國熱田の大宮司にかくまはれ、空しく月日を送りし所に、此度畠山の重忠東大寺再興の奉行に上るをよきしほと、先重忠を狙はんため、我身を卑しき下郎にしなし、すでに間近く附寄しが、運強き重忠にて、我らが智略現はれ、本意なくも打損じ、一向に重忠と刺違へ死なんとは思ひしが、思へば御身がなつかしく、子供が顔をも見まほしく、無念ながらもながらへて、扱唯今の仕合せなり。誠に久しく逢ぬ間に、子供もいたう成人し、御身もずんと女房をし上たり。なんでもこよひはしつほりと、積るつらさを語らん」と、しとよれば、阿ゑよ榮耀らしい。かく浪人の憂身といひ、殊更敵を持つたる身が、せめて一年に一度の便も仕給はず。ヲ、それも道理よ。此ごろ



うちぶる―物憂  
くある、裏にか  
けたり  
をかしい迄―迄  
は無意の強辭

八幡―誓詞

犬が食ふ―夫婦  
争は犬も唯はぬ  
の態を當時は食  
ふと云へり

聞けば大宮司の娘、をのの姫とやらんに深い事と承る。尤かな、みづからは子持筵のうらぶれて、見る目にいやとおほすれども、子に絆されて御出か。恪氣するではなければ、浮世狂ひも年による。しや、眞にをかしい迄、よい機嫌じや」と有りければ、景清打わらひ、「是は迷惑。其大宮司の娘をのの姫には、しかく物をいはいはばこそ。八幡々々さふした事で更になし。そちらで世の中に、いとしい者が有べきか」と、なほこそもたる袖枕。阿古屋も心打解て、思ふあまりの戀いさかひ。犬が食ふとや是ならん。銚子盃たづさへて、いや石に酌とらせ、三とせ積りし物語、かたらひあかし給ひける、契の程こそゆかしけれ。景清のたまふやう、「我久しく尾州に蟄居して、觀音參詣怠れり。在京の間は一先日參の心ざしあり。さりながら是より毎日往來せば、人の咎めも如何なり。とどろきの御坊にて、一七日は通夜申す。やがて歸り對面せん」と、編笠取て打かづき、おもてを指して出給へば、いや石門迄送り出で、「さらばく」の小手招き、しほらしかりける生先なり。こよに阿古屋が一腹の兄、伊庭の十藏廣近は、北野詣をしたりしが、大息ついでわが家にかへり、妹の阿古屋をかたはらに招き、「是を見よ、誠に果報は寢てまてとや。悪七兵衛景清を討てなりとも、搦めてなりとも參らせたる物ならば、勳功

兵衛—景清

は望次第との御制札を立られたり。我らが榮華の瑞相此時と覺えたり。兵衛はいづくに有けるぞ。はや六波羅へ訴へて、一かど御恩にあづからん。いかにく」と申しける。阿古屋はしばし返事もせず、涙にくれてゐたりしが、「なふ兄上、そもや御身は本氣にて宣ふか。たゞしは狂氣し給ふかや。わらはが夫にて候へば、御身のためには妹婿。此子は甥にて候はずや。平家の御代にて候はば、誰かあらふ景清と、飛ぶ鳥迄もおちし身が、今この御代にて候へばこそ、數ならぬ我々を頼みて御入候ものを、たとへば日本に唐土をそへて給はるとて、そもや訴人が成るべきか。飛ぶ鳥懐に入る時は狩人も助くるとよ。きのふ迄もけさ迄も、隔てぬ中をそもやそも、遁れふ物かさりとては、人は一代名は末代、思ひわけても御覽せよ」と、泣いづくといつとどめける。十藏からく」と打笑ひ、十、やれ名ををしみて徳をとらぬは、昔風の侍とて當世は流行らぬ古い事。其上御邊が夫よ妻よなどとて、心中立てはしけれ共、あの景清はな、大宮司が娘をのの姫に最愛し、御身が事は當座の花、後悔する共叶ふまじ。女さかしくて牛賣れぬとは御分が事ぞ。諸事は兄に任せよ」と、とんで出れば又引とどめ、四いや大宮司のむすめは人のいひなし悪口ぞや。景清殿にかぎりさやうのことは候まじ。よし人はともかくも、わ

女さかしう云々  
—女が出過ぎて  
失敗する意の隠

遁れふ—身を引

いなせの便一音  
惡の音信

らはが二世の夫ぞかし。さ程に思ひする給はば、子供もわらはも害して後、心のまよになし給へ。やあ生らん内はかなはじ」と、縋りついてぞ泣き給ふ。しかる所へ、飛「熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清様の御旅宿所はこれにてや候らん」とやがて文箱を出しける。十藏出であひ、「いかにもく是は景清殿の旅宿にて候が、宿願あつて兵衛殿は清水參詣いたされ候。御ふみを預り置き、歸られ次第見せ申さん。明日御出候へ」と飛脚を返し、兄弟ふみをひらいて見れば、をのの姫のふみにてあり。又「かりそめに御のほりましまして、いなせの便もし給はぬは、かねぐきよし阿古屋といへる遊女に御したしみ候か。未來をかけし我契、いかど忘れ給ふか」と、こまぐとぞかゝれける。阿古屋は讀みも果て給はず、はつとせきたる氣色にて、阿「うらめしや腹立や、口惜や妬まじや。戀にへだてはなき物を、遊女とは何事ぞ。子のある中こそ誠のつまよ。かくとは知らではななくも、大切がりとしがり、心を盡せし悔しさは、人に恨はなきものを、男畜生いたづらもの。ア、うらめしや無念や」と、文ずんぐにひきさきて、かこち恨みて泣き給ふ。ことわりとこそきこえけれ。十藏悦び、「それ見たか。此上は片時も早く訴人せん。最早思ひ切たか」といへば、阿「チ、何しに心の残るべき。せめて訴人してなりとも、此恨

随回したる一執  
念深

直兇―揃ひて甲  
冑を著けたる兵

を晴してたべ」土けによき合點」と立出れば、又「暫く」と引とどめ、四」とはいひながら、如何にうらみがあればとて、夫の訴人はなるまいか。いや又思へば腹も立つ。にくいは女め。エ、是非もなや」と、或ひは止め或ひは勧め、身をもだへてぞ歎かるよ。十藏袂をふり切て、「エ、輪廻したる女かな。そこ退け」と突のけて、六波羅指して急ぎしは、了簡もなき三重しだいなり。斯くとは知らで景清は、清水寺に參籠し、とどろきの御坊に通夜申し、同宿達に双六打たせ、助言してこそゐられけれ。頃は卯月十四日夜半ばかりの照月に、直兇五百餘騎、江間の小四郎大將にて、訴人の十藏まつ先にかけて、とどろきの御坊を二重三重に取まはし、関の聲をぞつくりける。元來こらへぬ荒法師、門外につつ立て、御坊そも此寺は田村將軍此方守護不入の靈地なるに、狼藉は何者ぞ。夜盜人などと覺えたり。あれ小僧共打とれ」と聲々によばはれば、江間の小四郎駒かけよせ、「さなはいはれそ法師たち。御坊に咎はなけれ共、平家の落人悪七兵衛景清今宵こよに籠りしよし、伊庭の十藏訴人によつて、義時討手に向うたり。異儀におよばば寺ともいはせじ沙門ともいはずまじ、かたはし切て切ちらせ」といひもあへぬに、且悪七兵衛是有り」と切て出る。常陸の律師敷範此由を見るよりも、「慈悲第一の此寺にて信心の行者

まうなく一も  
二もなく、たや  
すく  
しるみー弱る

にへこむー減入  
る

てつく、丁椎、  
ぐしー双六詞の  
置五、重一、五四  
に掛く

唇人云々ー愚痴  
多者如々燈婦赴  
火(天智度論)

を空しく討たせては、観音の誓願はいかならん。防けやく、法師ばら、支へよや下僧共」  
「承り候」と衣の袖を絞り上げ、獲物々々を提けて、三十餘人の荒法師、五百餘騎につつ  
さよへて、命を惜まず、三重戦ひける。五百餘騎が四方に分つて、隙をあらせず防けど  
も、景清は飛鳥の術をえたれば、さうなく討れんやうもなし。雙方しるみて控へたり。  
景清縁端につつ立て、「今宵の訴人は妻の阿古屋、おなじく兄の十藏と覺えたり。おのれ  
數年の恩愛を振捨て、大慾にふける愚人共、勿體なくも此御寺に血をあやす奇怪さよ。  
とても世になき某が、おのれらが身のためならば、何條命をしからん。人おほく打たせ  
んより、女房兄弟をりあひて搦めとれ」とぞわめきける。十藏が下人二三太といふもの、  
分別もなく飛んでかよる。景清につつこと打笑ひ、側にありける雙六盤、片手に取て投げつ  
くれば、二三太が眞甲に、響き渡つて發矢とあたれば、首は胸にぞにへこみける。其「チ、  
でつくともせぬ丁稚めが、手柄しさうに見えたれども、ぐしくとなりけるは、誠に愚  
人夏の蟲」とたはぶれて立つ所を、十藏つゞいて切てかよる。景清長刀押取のべ、「蟲同  
然のこつは武者、娑婆の訴人は是までぞ、閻魔の廳にて訴人せよ」と受つ流しつ切りむ  
すぶ。江間の軍兵是を見て、「訴人討すな加はれ」と、どつと連ておし隔つる。「心得たり」

と景清は、さいもんを小楯に取り、入かへく大勢を左右にうけ、肩間眞額鎧のはづれ嫌はずあまさず三重打たつる。「こは叶はじ」と軍兵共、十藏を引つよみ、六波羅さしてぞ引にける。景清「今は是迄」と、音羽の山の峯を越え、梢をふみわけ巖をおこし、飛びこえはね越え、利那が間に飛ぶが如くに、あづま路さして落行きしは、誠に稀代の武士やと、扱感せぬものこそなかりけれ。

## 第三

かくて其後、悪七兵衛景清行方しれずなりたれば、もつとも天下の御大事と、諸國の所縁を詮議ある。中にも熱田の大宮司は現在の舅とて、千葉の小太郎搦め取て警護厳しく打つれさせ、六波羅に引据ゆる。梶原源太大宮司に對面し、「汝は當家の大敵平氏の落人景清を、増にとるのみならず、剩さへ行方もなく落しける罪科甚だ輕からず。いづかたへ落しけるぞ。まつすぐに申せ。すこしも陳ぜば拷問せん」とはつたと怒つて申しける。大宮司聞給ひ、「仰の如く景清とは縁を結び候へ共、去年の春、國もとを立出で今に便も候

陳ぜば一偏を申  
さば

たつては―是非  
吟味しては

あこや云々―あ  
こやや子供、の愛  
に引かされて我  
戀中を裂かれん  
かとも  
くひく―くよ  
くよ、代に樹く

はず。土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すとて隠しとけられ申すべきか。婿に  
取りしを曲事とて誅せられんは力なく候。行方に於ては存ぜぬ」と、詞すどしく申さるよ。  
重忠仰せけるは、「尤もく。たとひ行方を知つたればとて、婿の訴人はいたされまじ。た  
つては此方の不調法。いかに梶原殿、かの景清は仁義第一の勇士なれば、所詮大宮司を  
牢舎させしと傳へ聞かば、舅の難を救はん爲、己れと名乗りて出ん事は目前に見え候。  
此儀はいかに」と有りければ、おのゝ「評定尤も」と、六波羅の北の殿に新造の牢を建て、  
大宮司を押込めさせ、厳しく番をぞ三重させせる。人につらくはあたらねど、何の  
報や袖の露、潤もはてなでをのの姫、いたはしやこぞの春、つまは都へ去しより、あこ  
やの松の夕しぐれ、染著られて若紅葉、こひや散らんとあけくれに、人目包のくひく  
と、案じ煩らふ身の上に、父は都の六波羅へ、擒となりてあさましや、憂目に逢せ給  
ふとの、その音づれをきよしより、思ひに思ひ積み重ね、切てはうきにかはらんと、乳  
母ばかりを力にて、旅の衣手涙冷たきくれなるに、紅絹裏濡れて夕ざれし、空飛ぶ鳥の  
かへるさに、物忘れせぬ故郷の、風もわが身にふきかへて、今の門出ををはりぞと、國  
のなごりもつよましく、身のたねまきし産の神、熱田の宮居伏拜み、父と夫とを安穩に

蠶名一桑の弓に  
かく、桑弧蓬矢  
は悪魔を掃ふ  
めざし一子供の  
類髪、めざしぬ  
らすな沖にをれ  
波(古今集)

青海首云々一青  
海首は逢ふ、か  
だのりは難し、  
相良布は不祥、  
神馬藻は名告る  
なにいひ掛く

土山一繩に掛く

悪魔はらへと取る弓の、桑名のふねに梶枕、敷寝の苫の荒席、肌はだへに荒てつらけれど、戀する海士の鴛鴦の、夜の衾と見るめかや、かづく荳藻はなにくぞ。歌によまれしひじき藻や、かだめ甘海苔春もまた、和布まじりのめざしなす、鹽屋が軒に竹見えて、おさな鶯音をぞなく、花にまがひの櫻海苔、天をひたせば雲のりに、月を包みて刈るとはすれど、手にはとられぬ、桂男のア、いぶりさは。いつ青海苔もかだのりと、身の相良布を神馬藻や。あら珍らしと荒布刈る、二見の浦ははるくくと、松のむら立色の濱、蒔繪にかくも似たるよな。あとは白雲とばかりを、故郷の夢と空さめて、庄野に續く龜山は、誰がため永き萬代と、嘆つ涙は堰もせで、何をか關の地藏堂。せめて未來をたのまばや。のほりくだりてさかの下、谷の川瀬かはせにからころと、なるは海鹿かじかのなく聲か、小石流れて行くおとか。いや水のあはちる、玉でないよの、駒のひざぶしちんがらが、ちりからからりの、鈴鹿山、賤が草鞋の營みに、更ふてわら打つ土山や、だての旅路に行くならば、買ても給れ水口の、葛籠つらごに笠に露もりて、おのがまよなる鬢水は、櫛くしにたまらぬ亂髪とくくゆけば洛陽や、六波羅にこそは、三重著つかれけれ。扱あ父上のおはします半舎はんやはいづくなるらんと、こゝかしこにイミ給へば、をりもこそあれ梶原源太、町まはりしてかへるさ



暮ち―白狀する

に、此ていをきつと見て、源「きやつが有様たゞものならず。何ものざふ」とがめける。姫君聞召し、「さん候。みづからは、尾張の大宮司が娘なるが、ゆるもなきに父をとられ候ゆゑ、我命にかはらんため、是迄参り候」と、いはせもはてず景季、「ヲ、皆迄いふな。おのれが親の大宮司に、景清が行方を云へといへ共知らぬといふ。おのれは夫婦の事なれば、よも知らぬ事は有まじ。すでに清水坂の阿古屋は子のある中をふりすてて、一度注進申せしぞや。ありのまゝに白狀せよ」と、小腕取つていかりける。姫「なふ恨めしや。命をすてて是迄出る程の心にて、たとへ行方をしつたればとて申さふか。此上は水せめ火せめにあふとても、夫の行方は存せぬなり。唯父上を助けてたべ」と、聲もをしまさなき給ふ。源「ヲ、いふ迄もない事さ。おのれ落すばたゞ置かうか」と、高手小手に縛りつけ、六條河原に引出し、種々に拷問したりしは、なふなさけなふこそ。三重 見えにけれ。梶原親子が奉行にて、方一町に垣をゆひ、つく棒さすまた鐵の棒、兵具ひつしと竝べしは、さながら修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を、苛責にかくるごとくなり。いたはしやをの姫、あらし風にも常ぬ身を、はだかになして繩をかけ、十二の梯子に胴中を縛つけ、哀れもしらぬ雑人ども、湧桶に水をつぎかけく、「おちよく」とせめけるは、たゞ瀧

津瀬の如くにて、目もあてられぬ景色なり。むざんやなをのの姫、息もはやたへぐくに  
心も亂れ目くるめき、既に最期と見えけれども、いやく武士の妻となり、心よわくて  
かなはじと、さあらぬ禮にもてなし、鯉、いかにかたぐ、夫の景清つねに清水寺の觀世  
音を信仰し、我にも信じ奉れと、深く教へ給ふゆゑ、今とても尊號を、たえず唱へ奉  
れば、此の水は觀音の甘露法雨と覺えたり。今この水にて死する命は惜からじ。夫の行  
方は知らぬぞや。千日千夜も責め給へ。南無や大慈大悲のくわんぜおん」と、苦しき體を  
おしかくし、いさぎよくは宣へども、さすが強き拷問に、聲も濁りて身もふるひ、よわ  
よわとなり給ふは、扱も悲しきしだいなり。眞此分にてはおちまじきぞ。やれ古木責に  
せよや」とて、細首になはを付、松の枝に打かけて、「えいやく」と引あぐる。下せば  
少し息をつぎ、引あぐれば息たゆる。あはれといふも餘りあり。眞たとへいかなる鬼神  
も是にてはおつべし」と、二三度四五度責めければ、今はかうよと見えけるが、又目を  
ひらき、鯉なふ梶原殿、此木の上に吊上られ、世界を一目に見おろせ共、夫の行方は見  
え申さず。かたぐもなぐさみに、ちつと上つて見給はぬか。是へく」と有ければ、  
景時腹にすゑかね、「扱々しぶとき女かな。此上は引おろし、火責にせよ」と、炭焚木を

見参—も目にか  
かる

仰々—大層ら  
しい

つみかさね、團扇をもつてあふぎ立て、天をかすめし黒煙は、焦熱地獄といひつべし。すでに責めんとせし所に、悪七兵衛景清、いづくにてか聞たりけん。諸見物の其中を、飛び越え跳ね越え垣の中に躍り入り、「こりや景清ぞ見参」とはつたと睨廻し、仁王立にぞ立ちたりける。姫君はつと肝潰れ、立寄らんとし給へば、人々取て引する、「すは景清をのがすな」と、一度にはらりと取まはず。景清からくと笑ひ、「エ、仰々し。此景清が隠れんと思はば、天にもあがり大地をも潛らんずれども、妻や舅が愛目をみるかなしさに、身をすて出たれば、もはや氣遣ふ事はなし。さあよつて繩をかけ、六波羅へ連れて行け。妻や舅を助けよ」と、手向ひしてんす氣色なし。姫君涙をながし、「口惜しの有様や、みづからや父上は、生きてかひなき愛身なるに、御身は存らへ本望遂げんと思さずして、何とて是へは出で給ふ。あさましの御所存や」と、又さめくと泣き給ふ。景清も涙をおさへ、「ヲウ頼もしの心底や。人は素性が恥かしよ。子中をなせし阿古屋めは、夫の訴人をしたりにしに、御身は命にかはらんとは、頼もしや嬉しやな。去ながら、父大宮司の御事、心もとなふ覺ゆれば、御身は是よりとくくかへり、菩提をとふてたび給へ」と、鬼をあざむく景清も、不覺の涙をながしける。理りせめて哀れなり。この事六波羅に聞へしか

神妙―感心なり

ば、重忠大宮司を同道にて、六條河原に馳せ來り、眞さても景清人の難儀を救ひ、我身を名乗りて出らるゝ段、近頃神妙、尤もかうこそあるべけれ。此上はをのの姫、大宮司共に御赦免なざるゝ條、景清に繩をかけ、急ぎ引立申すべし。畏て人々、「繩よ綱よ」と奪けば、景清よろこび、「それこそ望む所よ」と、おのれと千筋の繩をかより、先にすよめばをのの姫、「なふみづからも諸共」と、駈出で取付き泣き給ふを、大勢中を押隔て、あたりを拂つて引立て行く。彼の景清の心底、勇あり義あり誠あり、前代未聞の男なりとて、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

## 第四

御手―櫛の多く  
十字に打違いた  
り形  
裏を返さず―釘  
の尖端を曲げず

かくて其後、實にや猛將勇士も運つきぬれば力なし。不便やな景清、鎌倉よりの評定にて、六波羅の南おもてに、始めて牢を立させらる。櫛白櫛楠の木柵の木、長さ一丈にとらせ、地へは七尺掘入れ、上三尺の詰牢にし、この木を以て御手格子に切組んで、一尺二寸の大釘の裏をかへさず打たれば、劔をうゑたる如くなり。七尺ゆたかの景清を、二

山出し山育ちのあちくれ人足

文王は云々二者共に罪なくして咎を得たる例世間口を閉づ

重に取ておし入れ、髪を七把にたばねて、七方へこそつたりける。足を牢より引き出し、左手右手へ取ちがへ、山だし七十五人してひいたる桶にてあけ、ほだしをうたせ、しつ錠詰金、たうくくると千引の石材木を積み重ね、首には根堀の大筒を、二本迄かづかせたり。「諸人に見せて恥かよせよ」と、番も警護も付けざれ共、なかく五體働かず。されば文王は姜里に捕はれ、公治長は刑戮にかゝれり。君がため名のため何ぞかつて討たれんと、観音經の讚誦のほか、世間口を閉ぢたれば、聲聞耳に閉せり。はたらくものは兩眼のみ。見るめもかなしくあはれなり。いたはしやをのの姫、不思議のいのち助かり、牢屋ちかきに宿を取り、酒菓物をととのへて、牢屋の格子に立寄り、いたはり給ふぞ哀れなり。やうくとして景清、心地よけに酒をのみ、無「今日は一しほ骨髓にとほつて候。まことに御身の心ざしいつの世にかはわするべき。扱かりそめながら某は天下の朝敵、さだめて最期も遠からじ。今景清が生きたる顔をかたみにて、疾々御身は尾張へ下り、後世弔ふてたび給へ。これに付けても阿古屋めが心底のうらめしさよ。二人の子供も今は早や殺してや捨てつらん。思へばく景清が運のつきこそ口惜しけれ」と、恨みかこちて泣き給ふ。姫君も涙をながし、「御仰せはさる事なれども、とてもみづからは御最

先途一なりゆき

期の先途を見とどけ、兎にも角にもなり参らせん。一日も一時も御命のあらん内は往生の御營みを心にかけて何事も、定まる事と思召し、人を恨み給ひそよ。いつ迄も是にありたく候へども、人目しけう候へば、明日又参り申さん」と、泣くく歸り三重給ひける。是は扱き置き、阿古屋の前、いや石いや若もろ共に、山ざき山の谷陰に、深くかくれておはせしが、景清牢舎と聞くよりも、我身もあるにあらばこそ、六波羅に走り付き、此體を一目見て、「なふあさましの風情やな。やれあれこそ父よわが夫」と、牢の格子にすがりつき、泣くより外の事ぞなき。景清大の眼にかどを立て、「やれ物知らずめ、人間らしく言葉をかくるも無益ながら、かほどの恩愛をふりすて、夫の訴人をしながら、何の生面下けて今此所へ來りしぞ、おのれ、指一つかなひなば、掴みひしいで捨ん物を」と、齒がみをしてぞゐられける。阿實に御うらみは理りなれ共、わらはが事をも聞き給へ。

兄にて候十藏、訴人せんとせしを、再三留めて候所に、大宮司の娘をのの姫とやらんよ、親しき御ふみ参りしゆゑ、女心のあさましさは、嫉妬の恨みに取みだれ、あとさきさのふまへもなく、當座の腹立やるかたなく、ともかくもと申しつる、後悔さきに立たばこそ。さは去ながら嫉妬は殿御のいとしさゆゑ、女のならひ誰が身の上にも候ぞや 申譯

書落—非に替つ

さりとは—左  
襷にお腹が立つ  
とはいへ

いたすほど皆言落にて候へ共、今迄の好しみに、道理一つを聞分けて、唯何事も御免あり、今生にて今一度、詞をかけてたび給はば、それを力に自害して、わが身の言わけ立て申さんと、地にひれ伏してぞ泣き居たる。無慙やな、いや石父が姿をつくぐ見て、「なふ父上程の剛のものが、なぞやみくとは捕はれ給ふぞ。いで押しやぶつて助け奉らん」と、柱に手をかけ、「えいやく」と押せ共ゆるがばこそ、ふびんなりける所存なり、弟のいや若は、ほだしの足にいだき附「いたいかや父上様、なふいたむか」と、撫さけさすり上げ、兄弟わつと叫びければ、思ひ切たる景清も不覺の涙せきあへず。やあつて涙をおさへ、是「やれ子供よ。父がかやうに成たるはな、皆あの母が悪心にて、繩をも母が掛させ、牢にも母が入れけるぞ。邪慳な母が胎内より出たる者と思へば、汝ら迄が憎いぞや。父とも思ふな、子とも思はじ。はやく歸れ」と吐るにぞ、子供は母に縋り附、「なふ父をかへしや、父上かへしや」と、ねだれ嘆きし有様は、目もあてられぬ次第なり。あこやは餘りたへかねて、阿「よし此上はみづからは兎も角も、可愛やな兄弟に、優しい詞を只一言、さりとはかけてたべ。なふ子は可愛いうは思さぬか」と、又せき上げてぞなげかるよ。景清重ねて、「おことがやうなる悪人に返事もせじとは思へど

獅子身中蟲一仁  
王經に出づ

もな、今のくやみをなど最前には思はざりしぞ。されば天竺に獅子といふ獸あり。身は畜生にてありながら、智慧人間に超えたれば、狩人にもとられず、却つて人を取食ふ。され共腹中に蠱毒といへる蟲あつて、此蟲毒を吐くゆゑに、體を破つて自滅すなり。されば女の嫉妬の仇、人を恨むと思へ共、夫婦はおなじ體なれば、皆是わが身をせむるこゝとわり。和御前がやうなる我慢愚痴の猿智慧を、獅子身中のむしに譬へて、佛も戒しめ給ふぞや。汝が心一つにて、本望とけずあまつさへ、恥辱の上の恥辱を取り、今いひわけして妻子がなけくを、不便よとて日本一の景清が、再び心をかへすべきか、何程いふても汝が腹より出でたる子なれば景清が敵なり。妻とも子とも思はぬ」と、おもひ切てぞゐたりける。阿「扱は何程申しても御承引あるまじきか」蟲「チ、くどいく。見苦しきに早々かへれ。思ひ切たぞ」阿「なふもはやながらへて何方へかへらふぞ。やれ子供よ。母があやまりあればこそかく詫言いたせども、つれなき父御の詞をきいたか。親や夫に敵と思はれ、御主等とても生きがひなし。此上は父親もつたと思ふな。母ばかりが子なるぞや。みづからもながらへて、非道の浮名ながさん事、未來をかけてなさけなや。いざもろ共に死出の山にていひわけせよ。いかに景清殿、わらはが心底是迄」と、いや石を引



息を計り―思の  
限り

寄せ、守刀をすばと抜き、「南無阿彌陀佛」と刺し通せば、いや若おどろき聲を立て、「いやいや我は母様の子ではなし。父上たすけ給へや」と、牢の格子へ顔を差入れく、にけあるく。阿エ、卑怯なり」と引よすれば、「わつ」といふて手を合せ、若「ゆるしてたべ。こらへてたべ。あすからはおとなしう月代も剃り申さん。灸をもすゑませふ。扱も邪見の母上様や。助けてたべ父上様」と、息を計りに泣きわめく。阿ヲ、理りよ去ながら、殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるゝぞ。あれ見よ兄もおとなしう死したれば、おことや母も死なでは父への言譯なし。いとしいものよ、よう聞け」と、すよめ給へば聞入つて、若あよそれならば死にませふ。父上さらば」といひ捨てて、兄が死骸に寄かゝり、打あをのきし顔を見て、いづくに刀を立つべきぞと、阿古屋は目もくれれ手もなへて、まろび伏してぞ歎きしが、「エ、今はかなふまじ。必らず前世の約束と思ひ母をばし怨むるな。追附行くぞ南無阿彌陀」と、心元をさしとほし、「さあ今はうらみを晴し給へ。迎へ給へや御佛」と、刀を咽に押あて、兄弟が死骸の上にかつばと伏し、共に空しく成り給ふ。扱も是非なき風情なり。景清は身をもだへ、泣けどさげべどかひぞなき。「神や佛はなき世かの。去りとはゆるしてくれよ我が妻よ」と、鬼をあざむく景清も、聲を上

しなしたりし  
くじつたり

偏執一恨み嫉み

いきばね云々  
隠ても立てぬか

いかつはいて  
いかめしげに

けてぞ泣きるたり。物の哀れの限りなり。かくとはしらでいばの十藏、梶原がとりなしにて、少々勳功に預かり、若黨小ものあまた連れ、遊山より歸りしが、此體を見て肝をつぶし、伊是は扱しなしたりく。不便の事を見る物かな。これ侍共、我此如く御恩賞を受け、榮耀榮華に榮ゆるも、きやつ等を世にあらせんため。この頃方々尋ねしかども、行方のなかりしが、扱は何者ぞ偏執を起し害せしか。たゞしは大宮司がはからひと覺えたり。よし何にもせよ。なほ景清に言分あり。先々死骸を取おけ」と、傍らに葬ぶらせ、牢屋にむかつて立はだかり、伊是さ妹むこ殿、いかに怨あればとて、現在の妻子を殺させ、腕かなはずば、などいきほねでも立ざるぞ。ないくは某御邊が命を申しうけ、出家させんと思ひしが、最早ほつてもならぬく。侍畜生大はけ」と、いかつはいてぞ申しける。景清くつくくとふき出し、「こりやうろたへもの、あのもの共はおのれが貪慾心をかなしみ、自害したるが知らざるか。それさへあるに、うぬ奴が口から侍畜生とは誰が事ぞ。命惜しむ程ならば、かゝる大事をたくむべきか。また生様と思ふ程ならば、べろべろ柱の五十や百、此景清が物のかずと思ふべきや。心静に觀音經どくじゆする嬉しさ、なぐさみ半分に牢舎して有るものを、くわんたい過ぎたる嘆言つき、二言と吐かば

振づんばいゝ振  
磯也、手なくし  
て磔を打つ如き  
叶はぬ事にいふ  
(俳言集覽)

痲痺一頸より胸  
肩へかけて引き  
つり痛む病

切れてのいたゝ  
切れて仕舞うた

掴みひしいで捨てんとす」と、はつたと睨んで申さるれば、十藏からくくと笑ひ、「其縛にあひながら、某をつかまんとは、腕なしの振づんばい。片腹いたし事をかし。幸此頃痲痺痛きに、ちつと攪んで貰ひたし」と、空うそぶいてぞるたりける。景清はらにするかね、「いでものみせん」といひもあへず、「南無千手千眼生々世々、一聞名號滅重罪、大慈大悲觀音力」と金剛力を出し、「えいやつ」と身慄すれば、大釘大繩ばらくと切れてのいた、門取て押ゆがめ、扉をかつばと踏倒し、大手をひろけて跳り出で、八方に追廻すは荒れたる夜叉の三重ごとくなり。むらがる若黨中間はらりくと蹴倒し、十藏を搔掴み取て追伏せ、脊骨も折れよとどうとふまへ、豈何と景清を訴人して御褒美にあづかり、榮花といへるは此事か」と、二つ三つふみ附れば、土なふかなしや。骨も碎けて息も絶え入り候。御慈悲に命をたすけ下され」と、聲を上げて泣にける。景清手を叩き打笑ひ「ヲ某が褒美には、廣い國をとらせん」と、兩足取て逆さまに引上げ、肩をふまへてえいやつと裂きければ、胸中より眞二つに、さつと裂けてぞのきにける。「エ、心地よし氣味よし」と、左手右手へからりと捨て、「さあ仕濟たり。此上は關東へや落行かん。いや西國へや立退ん」と、行きつ戻りつ行きつ、一町ばかり走りしが「いやく、此度落失せ

なば、又大宮司やをのの姫、憂目を見んは必定」と、思ひ定めて立歸り、もとの牢屋に走り入り、内よりくわんぬきしとと締め、千筋の繩を身に纏ひ、さあらぬ體にて普門品讀誦の聲はおのづから、即身菩薩の變化ならんと、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

## 第五

かくて其後、右大將頼朝公、南都の大佛御再興ましく、既に成就と訴ゆれば、供養の報謝に急ぎ大赦を行ふべしと、天が下の科人京鎌倉の牢を開き、残らず御免なされける。中にも悪七兵衛景清は大事の朝敵重罪なれば、助くるに所なく、佐々木の四郎に仰せ附られ、終に首を刎ねられ、今は四海太平なり。大佛供養御聽聞有るべしと、諸國の大名御供にて、南都に御下向なされける、路次の行列、三重花やかなり。すでに我君、小倉堤にさしかより給ふ時、畠山の重忠息をばかりに駆せ來り、御馬の前に躡つき、黒扱も悪七兵衛景清は御成敗のよし承り候へ共、未だ恙なく牢の内に罷有り候。一大事の囚人なれば、早々首を刎られ然るべく候はん」と謹んで申し上る。頼朝聞召し、「不思議の事を申す

小倉堤―巨探池の堤、山城宇治のはとり也

變留れねむり

物かな。景清は佐々木の四郎に申附け、一昨日の暮程に首を打せ、即ち其首頼朝が見參して獄門にかけさせしが、僻事成るか」と仰せける。重忠重ねて、「其段は存ぜず候へども、重忠は今朝景清が生顔をたしかに見て參り候」と、いひもはてぬに佐々木の四郎つと出で、「いや是畠山殿、筋なき事な申されそ。其景清は某仰を承り、高綱が手にかけ首を刎ね、我君の實験にそなへ三條畷に獄門にかけて候物を、景清がふたりあるべきか。近頃粗忽千萬」と、嘲笑うてこそ申さるよ。重忠聞給ひ、「尤々御分が手にもかけつらめ、又重忠も確に見て候はいかに」高綱色を違へ、眞はて埒もない事、一度切たる景清が、蘇生るべきやうもなし。それは定めて血迷ふて何かな見つらん。但しは寢惚れて夢をばし見たまふか」眞いやさ御分は狼狽で、よしなき者を景清と思ひ、切たるか」眞夢を見たるか」眞慌てたるか」眞是目を覺して思案せよ」と、氣色かはつて争ひける。頼朝だんく聞召し、「いか様佐々木畠山粗忽ある人にてなし。不思議千萬晴れやらす。是より取て返し、頼朝直に見分くべし。おのく鎖れく」と、御馬の鼻を立なほし、都にかへらせ三重給ひける。去程に三條畷に景清の首を切かけ、平家の一族謀叛の頭領、悪七兵衛景清と高札を添へられたり。頼朝立より御覽あり、高綱重忠を招き、「是見られよ」

歴劫不思議一萬劫を歴て思議すべからざる佛法(法華經)

枯れたる木に云云一干手陀羅尼

と仰せける。重忠なほ不審暗れず。諸大名立かより、よくく見れば今迄景清の首と見えけるが、忽ち光明赫奕として、干手觀音の御首と變じ給ひける。歴劫不思議を有難し。然つし所へ清水寺の大衆、我もくと馳せ參じ、一扱も一昨日の夜中に佛前の薨おのゝあきて候ゆる、もし盗人のわざにやと御戸をひらきて候へば、觀世音の御首斬れて失せさせ給ひ、切口より血流れて、禮盤長床朱に染み、勿體なき御風情に拜まれさせ給ひ候故驚き入て御注進申上候」と、事の次第を申上れば、君を始め奉り、畠山も高綱も、供奉の上下おしなべて、「あつと感ずるばかりなり。君信心の感涙をながさせ給ひ、頼誠や景清、年來清水寺の觀世音を信じ奉り、十七の春より卅七の今日迄、毎日卅三卷の普門品を讀誦懈怠なく修行せしと聞けるが、疑ひもなく觀世音、兵衛が命にかはらせ給ふ有難さよ」と、御手を合せ給ひければ、僧俗男女下々迄、皆々禮拜恭敬して、涙を流さぬ者はなし。重ねての御錠には、鵜かくては如何勿體なし。急ぎ千人の僧を供養し、一萬座の護摩置かせ、御ぐし繼ぎ奉れ。法事の上にて景清にも對面致すべし。いざ頼朝も參詣せん」と御身を淨め、佛の御ぐしを直垂の袖にうけ入れて、清水寺への御參詣、例まれにぞ聞えけれ。枯れたる木にも咲く花の、干手の誓ぞ有難き。かくて頼朝御法事も事をは

經曰、大神聖を以て乾枯樹を咒せしに尙杵柯花果を生ず

いで其頃云々以下諸曲景清の文句

り、佛の御ぐしをつぎ參らせ、宿坊に入らせ給ひける。時に佐々木畠山景清夫婦を伴ひ御前に出らるよ。頼朝御覽じ、「珍らしや景清、我を平家の敵とて狙ひ討べき心ざし、神妙神妙。尤も武士の憤けにさふも有るべけれ。然れば頼朝がためには御邊又敵なれば、うつて捨つべきものなれど、汝が身には觀世音の入替りましますゆゑ、二たび害せば觀音の御頭を二たび打つ道理、もつたいなし。もし又頼朝運盡きて、御邊に討たるよ物ならば、觀世音の御手にかよると思ふべし。此上は助け置き、日向の國宮崎の庄を宛行ふ」と、御懇誠の御詞に御判をそへて給はりける。景清涙をとどめかね、「誠に身に餘りたる御誼の段、生々世々に有難き、魂に徹つて覺え候。かくなさけある我君と知らで、狙ひ申せし景清が、所存の程こそくやしけれ」と、御前をも打忘れ聲を上げてぞ泣きたり。さて御土器給はり、諸國の大名残りなく、皆々さかづきさし給ふ。重忠仰せけるは、「斯るめでたき折といひ、かつは我君御なぐさみのため、和殿八島にて功名のやうす語で聞せ給へ。内々君も御所望ありしぞ。平にく」とありければ、頼朝公をはじめ參らせ、満座の人々一同に、「早とくく」とのぞまるよ。景清辭するに及ねば、袴の裾をたかく取り、御前に色代し、過ぎし昔を語りける。「いで其頃は壽永三年、三月下旬の事

物々しや云々  
小癩なと云ふに  
夕日を掛く  
うち物一箱刀、  
案の内より打に  
言ひ掛く  
鎌一兜の鉢の後  
方にありて頸を  
殺ふもの

なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に分つて、互に勝負を決せんと欲す。能登守のりつね、教經宣ふやう、去年播磨の室山備中の水島、鶉越にいたるまで、一度も味方の利なかつし事、偏に義經が謀、いみじきによつてなり。いかにもして九郎を討取る謀こそあらまほしけれと宣へば、景清心に思ふやう判官なればとて鬼神にてもあらばこそ、命をすてばやすかりなると、教經に最期のいとまごひ、陸にあがれば源氏のつはもの、餘すまじとぞかけむかふ。景清是を見て、物々しやと夕日影に打物閃めいて、切てかよればこらへずして、双向たる兵は四方へばつとぞ逃げにける。さもしやかたぐよ。源平互に見る目もはづかし。一人をとめん事はあんのうち物小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清よと、名乗かけく手取にせんとて追うて行く。三保の谷が著たりける兜の鉢を取はづしく、二三度逃延びたれ共、思ふ敵なればのがさじと飛びかより兜を押し取り、えいやとひくしほに、鍛は切れてこなたにとまれば、ぬしはさきへ逃げのびぬ。はるかにへだてて立かへり、三重さるにても汝おそろしや。腕のつよきといひければ、景清は三保の谷が、首の骨こそ強けれど、笑つて左右へのきにける。昔をわすれぬ物語お恥かしう候」と、語り給へば人々は一どにとつとぞ感じける。



かくて我君御座を立たせ給ひければ、大名小名つゞいて座敷を立ち給ふ。景清君の御うしろ姿をつくぐと見て、腰の刀をすりと抜き、一文字に飛びかよる。おのく「是は」と氣色をかへ、太刀の柄に手をかくれば、景清すさつて太刀を捨て、五體をなげ打ち涙を流し、「あゝ南無三寶あさましや。何れも聞て給はれ。かく有がたき御恩賞を受けながら、凡夫心の悲しさは、昔に返へる恨の一念、御姿を見申せば、主君のかたきなる物をと、當座の御恩は早や忘れ、尾籠の振舞面目なや。眞平御免をかうぶらん。誠に人のならひにて、心にまかせぬ人心。今より後も我とわが身をいさむる共、君を拜むたびごとくに、逆も此所存は止み申さず、かへつて仇とやなり申さん。とかく此兩眼のあるゆゑなれば、今より君を見ぬやうに」と、いひもあへず差添ぬき、兩の眼玉をくり出し、御前にさし上げて、かうべをうなだれるたりける。頼朝は甚だ御感あり、眞前代未聞の侍かな。平家の恩を忘れぬごとく、又頼朝が恩をもわすれず、末世に忠をつくす事、仁義の勇士、武士の手本は景清」と、數の御褒美淺からず、鎌倉差して入り給へば、なほ景清は觀音に、三萬三千三百卷の、普門品を讀誦して、日向の國を本領し、悦びく退出す。「なほく源氏の御繁昌、國靜謐の始めなるは」と、みな萬歳をぞとなへける。

